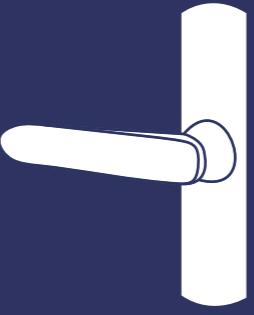


研究室のドアをノックしたら  
VOL.  
Ⅱ

「国際的視野に立ち 地域での課題発見・解決を目指して」

山口県立大学 国際文化学部 教育・研究・創作  
PBL を活かした活動の計画と成果





## PBL 推進の課題と可能性

国際文化学部長 水谷由美子

現在、私たちは Society5.0 の時代つまり不確実性の時代を迎えています。Society5.0(ソサエティ 5.0)とは、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）」と内閣府の『第5期科学技術基本計画』では定義されています。新型コロナウィルス感染症の拡大により、好むと好まざるにかかわらず、すべての人が新しい現実と向き合うことになりました。そして仮想空間が現実的なコミュニケーションの場にもなってきました。こうした新しいリアリティの体験はまだ未知の要素も多く、人間にとって快適で、健康的かつ機能的なコミュニケーションの方法が、開発されることが待たれています。

この問題とは別に、個人レベルで人々の本当の幸福とは何か、地域コミュニティとどう繋がるかなどの課題や、社会レベルでは地域や企業の課題、たとえば経済活動と環境問題の両立など、地球環境のサステナビリティの観点から、喫緊の課題が山積しています。

今日では課題・問題解決型学習 PBL (Project/Problem Based-learning) が広がってきており、本学部でも学内でのアクティブラーニングを経て、学外のフィールドに出て、芸術文化施設、地域コミュニティ、行政などと課題解決に向けて共創してきました。

2019 年度から山口県などが先導する企業をフィールドとした PBL 推進事業に参加しています。具体的には県内企業とマッチングされた研究室ゼミ、地域実習や地域文化実習のグループが半年から 1 年かけて、企業から提示された課題について、企業との共創により成果を出してきました。

PBL 推進の課題は、企業や地域コミュニティなどのフィールドと大学はそれぞれにスケジュールや進め方、使用する専門用語や語り方、ものやことに対する価値観など、あらゆる点において異なった文化をもっていることです。それ故に、課題解決の学習以前の段階で、共通言語を見出し、双方に信頼関係を築くことが必要です。同時に、経験や年齢差などがある中で、学生がミーティングに参加したすべてのステークホルダーとフラットな関係で自由に発想し、発言できる環境が作られなければなりません。

こうした事前の下地作りや課題の可視化などについてはたとえばサービスデザインやサービスシンキングなどの手法を駆使することで課題を克服することができます。

本冊子では国際文化学部の全教員がそれぞれの専門領域における実践活動や研究教育内容について紹介しています。特集として学生たちも執筆しています。PBL に参加した学生はやり遂げたことへの達成感により自信を得し、プレゼンテーションする姿はとても美しく輝いています。

最後に、本学部は移転し、2020年度後期から北キャンパス 3 号館で授業を開始しました。新しい校舎には次ページで紹介するいくつもの専門的な教室があります。学生の皆さんには、それらの教室ならではの機能を活用して、自身の描く夢に一步でも近づけるように励んで頂ければと思います。

## 3号館



### 国際文化学部 2・3・5F

国際文化学部は社会福祉学部とともに 2020 年 10 月から北キャンパス 3 号館で授業を開始しました。

### 1・2F



個人学習スペース



### 山口県立大学 図書館

新生図書館ではグループ学習室や研修室もあります。

### 2F

#### 文化創造実習室 I ~ III



#### コンピュータ学習室

文化創造学科の全ての学生、特にプロダクト、ファッショニ、グラフィック、メディアなどデザインを学ぶ学生が使用します。職業ミシン、レーザーカッター、3D プリンター、および Adobe Illustrator などの CG ソフトウェアが使える PC が揃っています。



### 3F

#### スタジオ



#### 暗室



スタジオでは写真や映像作品の撮影、暗室ではアナログ写真の現像、シルクスクリーンの製版などを行います。

### 5F

#### アクティブ・ラーニング・スタジオ (ALS)



#### アクティブ・ラーニング・ランゲージ・ラボ (ALLL)



ALS ではプレゼンテーション、グループワーク、テレビ電話を繋いだ国際交流もできます。ALLL はコンピュータ機器を備えた、言語学習に特化した教室です。

#### 和室



茶道や華道、着物の着付けなどを通じて国際文化交流も行われます。

#### 国際文化学部事務室



#### ロビー

## 目 次

<b>PBL 特集 学生の視点</b>	6
国際文化学科 授業科目 グローバルプロジェクト / 地域実習Ⅱ	Christmas Market 2020 × やまぐちシードル・御堀堂 7・8
文化創造学科 グラフィックデザイン研究室 × 株式会社アディー	企業との共創 9
文化創造学科 企画デザイン研究室 × 防府市 野島	行政や地域コミュニティとの共創 9
<b>国際文化学科</b>	
林 炫情 (韓国語学研究室) / 川口 喜治 (中国文学研究室)	10
金 恵媛 (韓国社会論研究室) / 鈴木 隆泰 (アジア文化論研究室)	11
田中 菜採 (英語科教育法研究室) / 西田 光一 (英語学研究室)	12
吉永 敦征 (情報倫理研究室) / 吉本 秀子 (情報メディア論研究室)	13
井竿 富雄 (比較政治研究室)	14
岩野 雅子 (異文化交流論研究室) / ウィルソン・エイミー (アメリカ社会論研究室)	15/16
進藤 優子 (国際経済論研究室) / スワンソン・マーク (実践英語研究室)	17/18
<b>文化創造学科</b>	
畔津 忠博 (視覚情報研究室) / 池田 史子 (日本語学研究室)	19
稻田 秀雄 (日本芸能論研究室) / 菱岡 憲司 (日本文化論研究室)	20
古別府 ひづる (日本語教育研究室) / 松尾 量子 (ファッショングループ研究室)	21
吉岡 一志 (教育社会学研究室) / 渡辺 滋 (日本史研究室)	22
加藤 稔行 (日本文学研究室) / 倉田 研治 (メディアデザイン研究室)	23/24
小橋 圭介 (グラフィックデザイン研究室) / 斎藤 理 (地域文化創造論研究室)	25/26
水谷 由美子 (企画デザイン研究室) / 安光 裕子 (図書館情報学研究室)	27/28
山口 光 (プロダクトデザイン研究室)	29

## PBL 特集 学生の視点

本学部では、ゼミや授業などで多くのプロジェクトを行政、地域コミュニティ、さらに企業などと実施しています。

以下では PBL に参加した3つのカテゴリーで実施した事例を学生から紹介します。最初は山口市、山口商工会議所そして本学部が連携して実施しているクリスマス・マーケットのために授業受講者と企業が協働して実施した PBL の事例、次は、COC + から発展して実施されている企業との共創による PBL の事例、最後に山口県や防府市と山口県立大学の研究室が連携して中山間地域の活性化のために実施した事例を紹介します。

### 国際文化学科 授業科目 グローバルプロジェクト / 地域実習Ⅱ

指導教員：水谷 由美子 教授  
井竿 富雄 教授  
片山 涼子 非常勤講師

地元参加企業：やまぐちシードル  
つむぎラボ  
御堀堂  
中村民芸社

### Christmas Market 2020

日時：2020年12月12日～13日  
場所：山口市民会館 中庭  
主催：クリスマス・フィンランドプロジェクト実行委員会

山口市、山口商工会議所および青年部そして山口県立大学国際文化学科の3者がクリスマス・フィンランドプロジェクト実行委員会を2017年に立ち上げました。主にクリスマス・マーケットを協働で行なうことが目的です。今年で4回目となります。授業は地元の企業・団体と協働でマーケットにおいてテント・ブースを作り、そこでパネルで企業・団体の活動等を紹介しつつ、ワークショップを行なうことが目的です。学生はそれぞれの会社訪問、インタビュー、リサーチ、パネル制作、ワークショップの企画、サンプル制作・リハーサルなどの準備を行ない、本番を迎めました。

新型コロナウィルス感染症の拡大の中で、2000名の観客を迎え、多くの子供や同伴の大人がそれぞれのワークショップに参加しました。

### 文化創造学科 グラフィックデザイン研究室

- 企業との共創

指導教員：小橋 圭介 准教授

2019年から本学部では企業との協働によるPBLを開始し、主に文化創造学科デザイン創造コースの3年生がゼミの活動として取組みました。この教育プログラムは来年度も継続される計画です。社会に出る前に企業で商品開発やWEBを作るなど、実際に活用される物を世の中に出すことで、貴重な体験をしています。また、自信を得ているようです。

### 文化創造学科 企画デザイン研究室

- 行政や地域コミュニティとの共創

指導教員：水谷 由美子 教授

大学は長年、山口県の中山間地域の活性化の活動をしており、本学部でもいくつかのゼミが継続して取組んでいます。ここでは2019年から2年間に渡って取り組んできた防府市野島をフィールドとした活動を紹介します。この活動はゼミの大学院生と学部生が協働し、アートで地域の活性化を図ることを目的としています。島民の元気創出と同時に地域のプランディングをめざした商品開発なども手掛けています。



運天 香織（4年）  
李 信泳・高藤 花凜（3年）

×  
やまぐちシードル

やまぐちシードルで販売しているシードル (cider) は、リンゴをアルコール発酵させて造られるお酒です。フランスやイギリス、スペイン等西ヨーロッパではメジャーな飲み物です。そんなシードルをやまぐちシードルでは山口県山口市の阿東徳佐地域から栽培される「徳佐りんご」を使用して作りました。シードルは二種類があり、辛口の「UMI」、甘口の「YAMA」になっています。

## やまぐちシードル Made in Yamaguchi

ワークショップでは、コロナの影響で海外に行けない方々に、つかの間の時間でも海外の気分を味わってもらおうと、クリスマスカードの制作や、欧州のお酒の詩を販売、寒い冬の寒さで冷え込んだ体を温めてくれる温かいサイダーを販売しました。まず、クリスマスカードを実際に飾ることで、イベントに参加した若いお客様や家族の思い出を作り、詩を販売してユニークなクリスマスを満喫できるようにしました。今回のワークショップでは、山口県立大学の学生達だけでなく、山口市と協力関係にある山口大学の学生達と協力して進行しました。お互いの情報と意見を共有し、一緒にプロジェクトを進めることで、より良いワークショップが可能になりました。この機会に2大学間の交流を活発にすることが今後の課題だと思います。



三村 真海・山本 結子（3年）  
×  
つむぎラボ

2019年9月に結成され、山口市を拠点として山口をクラフトでつなぐ活動を行っている。地産の天然素材で温かみを生かしながら、手仕事で地域や世代を超えて交流を行い、忘れられつつある伝統の技を学び伝えている。地域のお祭りやイベントで螢かごやヒンメリのワークショップを行ったり、作品を出店したりするなど日々様々な活動を行っている。

## フィンランドのクリスマスオーナメント ヒンメリ WS

『ヒンメリを知ってもらおう、実際に作ってみよう』という思いで、今回のクリスマスマーケットでのワークショップが決定した。大小二つのヒンメリを作成し、それらを上下につなげたり大きいヒンメリの中に小さいヒンメリを重ねたり、様々な完成形ができるように工夫した。また、クリスマスらしい毛糸のポンポンを最後の飾り付けで使用した。結果として、1日目19人、2日目18人の合計37名の方々に参加していただいた。一回のワークショップ所要時間は30分程度で、小さなお子さんから大人の方まで、幅広い年齢層の方々に参加していただいた。課題としては、今回運営は2人で行っていたが、一度に大勢の方が来られた時に対応しきれなかった点が挙げられる。



鈴木 稲香・筒井 実優花  
野津 誓夏・松井 優奈（3年）

×  
御堀堂

1927年に創業した和菓子店で、外郎の製造・販売を行っている。山口外郎の元祖である福田屋は本学の福田百合子名誉教授の兄が継ぐ予定だったが、出征により亡くなられた為、福田家の外郎作りは御堀堂の創始者に受け継がれた。現在御堀堂で販売されている外郎の味は「白外郎」「黒外郎」「抹茶外郎」の三種類がある。

## 外郎カフェ

御堀堂の外郎を使用したお汁粉とドリンクを販売した。結果は、目標の150杯を達成することができ、売り上げも良かった。受付係が2人、お汁粉係が1人、ドリンク係が1人の計4人で販売をした。2日目の後半はお汁粉が売り切れてしまったが、クリスマス仕様にかたどった外郎をドリンクと一緒に販売したので途中で終わることはなかった。今後の課題として、買い出しや試作づくりなど、時間がかかる作業が多かったため、計画を立てて時間に余裕を持って行動すること、二日目に多くのお汁粉が売れたため、当日の曜日や気温などを調べて仮説を立て、準備することが大事だと思ったこと、大きいお金で購入される場合を想定して、お釣りを多く用意するという三点が挙げられる。



隱崎 なお・渡邊 菜歩（3年）  
×  
中村民芸社

中村民芸社では、室町時代に山口県で勢力を誇った大内氏のもとで誕生した大内塗と、丸顔におちょぼ口、切れ長の目もとが愛らしい大内人形を取り扱っている。大内塗は椀や盆、花器などが代表的で、金箔で大内氏の家紋である「大内菱」をあしらった絵模様などが特徴的。大内人形は、夫婦円満の象徴として人気の高い商品である。

## 大内人形のサンタクロースを作ろう！

パネル、ワークショップを通して大内塗について知ってもらうことを目標に、パネル制作、ワークショップ補助をしました。店頭に置く大内塗について説明したパネルと、ワークショップ用のクイズのパネルを作りました。ワークショップではパネルを使って大内塗や大内人形のクイズをした後、絵付けのサポートと絵の具の補給をしました。接客中に臨機応変な対応ができなかったこともありましたが、結果として2日間で計64組のお客様にワークショップを体験していただきました。またパネルを通してワークショップを体験されたお客様だけでなく、人形作りを体験されていないお客様にも大内塗について知ってもらうことができたと思います。





金崎 恵里那（3年）  
グラフィックデザイン研究室  
×  
株式会社アデリー

株式会社アデリーは、柳井市を拠点にスイーツを中心とした商品の企画・開発からデザイン、その魅力を引き出すカタログの制作、独自のルート開拓まで含めた物流・販売まで、あらゆるニーズに対応する「総合プロデュースカンパニー」。地元山口だけでなく、大阪・東京へも事業拡大し全国展開している企業です。

## デザインを考える上で

株式会社アデリーの皆さんと「ありがとう」をテーマにしたカタログギフトのデザインを考えました。コロナウィルスの影響でお会いする機会は減少しましたが、オンライン上での会議では直接プロのデザイナーから意見をいただくなど、充実した時間を得ることができました。実際に印刷会社に依頼してカタログギフトが完成して届き、自分のデザインが形になったものを手にした時の感動は今でも忘れられません。またゼミのメンバー6人分のカタログギフトを実際に店舗に置き、お客様にアンケートのご協力をいただきました。今回のPBLを通じて、デザインをする上でお客様のことやコスト面など本当に多くのことを考えなければならないと実感しました。



完成した作品「usa-gift」



藤本 めぐみ（4年）  
企画デザイン研究室  
×  
野 島

野島は、人口減少や高齢化など、島の維持に関わる様々な問題を抱えています。一方で、野島ならではの地域資源が多くあります。そこで、野島の美しさをアートで表現し、地域の活性化活動を行ないました。野島は、かつてツツジが咲き誇っていてこと、美しい夕日が望めることから、「茜島」の愛称を持ちます。よって、茜染めを活動のメインに用いています。

## 野島をアートで彩る

茜の栽培：山口市天花で、日本茜の育成をしています。将来的には、野島で育成し、茜島としてのイメージ定着を目指します。  
インテリア小物製作：「さろん中小路」のインテリア小物の製作をしました。素材は、茜染めをした布と、大漁旗とし、暖簾、カーテン、クッションを製作しました。「さろん中小路」は、古民家を再生した建物で、今後は、野島の拠点として、飲食の場や、お土産販売の場となります。

商品開発：野島らしさのある土産物を開発したいと考え、提案、製作しました。茜染め、大漁旗、デニムを素材とし、あずま袋、巾着、がま口、ミニバッグを製作しました。

陸、海、空からの野島：ドローンの映像や海中の映像を撮影してもらい、それらを編集、島民に共有しました。また、レインボーザイクリングのしまに乗船し、野島の外周を海から観察しました。野島の新たな魅力発見につながりました。



制作したミニバッグとあずま袋



林 炫情  
韓国語学 研究室

## 専門領域・自己アピール

社会言語学と外国語教育を専門としています。研究室のモットーは実践的な「語学力」を生かした「行動」と「創造」。持続可能な学びを目指して「どのように学ぶかを学ぶ」に、ゼミ生とともに日々奮闘中です。

## 「インターローカル人材育成」のための PBL 教育プログラム

「インターローカル人材」とは、地元の課題を新たな視点で再発見し、海外の地方の事例を参考にして解決したり、地域の資源を生かして双方の活性化を促したりする人材を指します。具体的な活動としては、2014年度、2015年度に「地域活性化」をテーマに掲げた、PBL型・海外フィールドワークを韓国・昌原市で実施、そして地域の再生と成長のための幸せな地域社会作りに関する日韓大学生共同セミナーを開催しました。また、2017年度には「地域のアウトバウンド観光拡大」の観点から地域が抱えている課題とその具体的な解決策を創り出すことを目指したフィールドワークを実施しました。そして、その成果を読売旅行とJTBに企画・提案し、テーマ性のある旅行商品の開発につなげることができました。2020年度は韓国語と英語で山口県立大学を紹介する大学PR動画を作成し、SNSで発信中です。ぜひご覧になってみて下さい。



山口県立大学 PR 動画画面  
<https://www.youtube.com/watch?v=aywUlNPNxA>



川口 喜治  
中国文学 研究室

## 専門領域・自己アピール

現代中国語と中国文学を担当しています。専門分野は中国の古典文学です。なかでも杜甫や李白で有名な唐代の漢詩を研究しています。書物や文献を通して古人との対話を試みていますが、なかなか上手くいきません。gifted、天賦の才能が「無い」ことを自覚していますので、ひたすら勤勉に研究を続けるしかないと考えています。

## 課題もわかっているし、答えも出ている、 が、問題がわからない

PBL（課題解決型学習）は、課題を自ら発見し、検討・考察し、解決策を提案・実施する学習という意味らしいです。

さて皆さんのこれまでの学習においては「(正しい) 答え」を導き出すことが最も重要であったと思います。ただよく考えみると、PBLにおいては課題も答えもすでに自明なのです。例えば山口県(だけではないですが)で若者人口が急速に減少しているというのは誰から見てもわかる「課題」です。そしてその「答え」は、山口県に若者を定着させる、山口県から県外に若者を流出させない、若者人口を増やすなどということになるはずです。

となると、PBLにおいて何が皆さんに求められているのでしょうか。それは「何が問題なのか」を探求することなのです。若者人口減少、若者の県外流出という現象において、何が要因となっているのか、どのようなメカニズムで若者が県外に流出するのかなどの問題を探求し、「答え」にたどり着く（この場合はその現象を食い止める）過程を個別・具体的に描き出し、その個々の問題について個別・具体的な回答を導き出すことなのです。



金 恵媛  
韓国社会論 研究室

## 専門領域・自己アピール

地域文化研究、社会老年学の研究をしています。どちらも学際的視座が求められる領域ですが、教育でも言語と社会、大学と地域をつなぐ PBL 学習に取り組んでいます。

## ゆるい感じで続ける文化間理解活動

大学と地域のコラボレーションによる「やまぐち韓国研究会」(2006 年以降)を紹介します。ゼミ生と地域住民と卒業生が会員となって、座学とフィールドワークを重ねてきました。

主な活動例として、韓国では、板門店見学や大学生交流、日本イメージの調査などを行いました。日本では、大内氏の祖とされる百済の王子「琳聖太子」の伝説に関するフィールドワークを行い、韓国公州からの市民交流団を案内しました。「YPU ドリーム・アドベンチャー・プロジェクト」として下関でフィールドワークを行い、文化間共生や地域コンテンツについて探究したこともあります。

2021 年度は、「Enjoy! あなたの知らない世界 with YPU」を計画しています。ゼロからの問題発見や活動は難しいかもしれません。まずは、参加してみませんか。



やまぐち韓国研究会と公州市民交流  
(2019 年 5 月)



鈴木 隆泰  
アジア文化論 研究室

## 専門領域・自己アピール

専門領域はインド哲学／仏教学／宗教学。立脚する手法は文献学（文字資料・文献資料を用いた人間研究・文化研究）です。サンスクリット文献のみならず、チベット訳・漢訳文献を用いての〈異訳対照研究〉によって、インドにおける大乗佛教経典の成立史・思想史の解明を目指します。

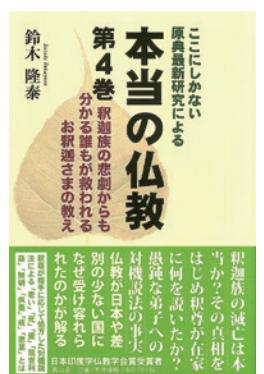
## satyam eva jayate (真実は必ず勝利する)

①涅槃經系經典群の研究。主要な文献は、『大法鼓經』『大雲經』『央掘魔羅經』『涅槃經』『法華經』。使用言語は、サンスクリット、仏教サンスクリット、チベット語、漢語です。

②仏教を一つの文化体系と捉えた上で、「教義と儀礼」の関係を中心に、インド仏教（特にインド大乗佛教）の実像に迫ります。主要な文献は『金光明經』で、使用言語は①と同じです。

③仏教を「自分の問題」として受けとめ、「今、ここにいる自分に通じるメッセージ」を仏典から読み解きます。主要な文献は、南伝上座仏教が伝える仏典。使用言語はパーリ語です。

<http://suzuki.ypu.jp/>



2020 年 12 月に刊行された近著



田中 菜採  
英語科教育法 研究室

## 専門領域・自己アピール

日本人英語学習者の英語リーディングについて主に研究しています。例えば音読や速読などの読解方法が言語習得にどのように役立つか、理論的な裏づけや科学的な根拠があるのかを調べて、より効果的な外国語学習へと発展させることを目指しています。研究室では、小学校英語教育や World Englishes など英語教育に関連する様々なトピックを扱っています。

## コロナに負けない英語の模擬授業

私の担当している英語科教育法の授業では、中学校・高校の英語の教員を目指す大学生が指導法を学んでいます。

例年英語の模擬授業を高校で行っていますが、2020 年度はコロナ禍の影響で中止となってしまいました。コロナと言えども教育実習には行かなければならず、大勢の生徒の前で教壇に立つ経験は大切です。そこで、高校での模擬授業の代わりに学内の 2 年生を生徒役とする英語の模擬授業を企画しました。模擬授業では受講生の特徴を事前にリサーチし、受講生の習熟度や興味に合わせた授業を展開することができました。これまで行ってきた少人数での練習とは違い、英語学習へのモチベーションを高める活動や指示など、大人数の授業だからこそ工夫しなければならない点に気づけたと思います。

2020 年は教育のあり方や常識が大きく転換した 1 年でした。今後は新しいテクノロジーや指導法も取り入れながら、生徒の状況に即した授業づくりを大事にしてほしいと思います。



西田 光一  
英語学 研究室

## 専門領域・自己アピール

専門は英語を対象とした理論言語学、特に語用論。日本語用論学会をはじめ言語学系の全国学会の運営に関与。海外の学会でも定期的に研究発表。新型コロナウイルスのため出張できないままだった 2020 年、コロナ禍とコミュニケーションを扱った論文を書き上げ、近く刊行。理論言語学から時事問題にアクセスできることを示したい。

## 英語の学習は英語のみの学習にあらず。

国際文化学科では英語学習が必須です。ただ、英語を英語の授業の中のもの、または TOEIC などの試験の対象としてでしか見ていない人が多いようです。でも、英語は英語圏の人々の生活であり、勉強では終わりません。ぜひ授業や試験以外で英語を楽しみ、実際の英語を身につけてほしいです。例えば、2016 年 10 月 3 日に REUTERS が “Teheran helps Braves close out Turner Field in style” と題した野球の記事を少し引用します。

Iglesias doubled to lead off the eighth inning against Ramirez. He was doubled up to end the inning when Ian Kinsler's liner was snared by Atlanta shortstop Dansby Swanson and relayed to second before Iglesias could get back to the bag.

最初の double は「2 墓打を打つ」、次の double は受け身で「ダブルプレーになる」、second と the bag は 2 墓の意。こういった英語は、英語よりも野球を知っているから読めて楽しめます。

英語からスポーツや芸能、料理など生活の楽しみに進むと、英語も飛躍的に伸びます。Lady Gaga の “Born This Way” を最初に聞いた時、「ライチャック」が意味不明でしたが、これが the right track の流暢な発音です。こういう英語の楽しみの発見をサポートしたいです。



吉永 敦征  
情報倫理 研究室

## 専門領域・自己アピール

世界を理解するには、原因や理由、考え方などを把握することが大切です。もちろん「世界」には自然だけではなく、他人や他の文化というものも入っています。

この研究室では、過去の哲学や倫理学のテキストを丁寧に読みながら理解する能力の向上を目指します。これは人生のさまざまな局面で自分を助けてくれる力になります。

## 課題解決に役立つ論理的思考（卒業生の声）

私はこの研究室で、論理的に物事を考える方法を学びました。卒業論文では言語哲学をテーマに選び、言葉の意味の理解と世界との関係について研究をしました。まずは言葉の意味が分かるとはどういうことかについて、この分野の基礎的な考え方を調べました。次に2人の哲学者の主張を取り上げ比較を行いました。その作業を通じて対立する意見を整理する方法や、問題の本質的な部分は何か探る能力が身に付きました。

社会に出れば、進路に拘らず、様々なバックグラウンドを持った人々とのコミュニケーションや、より複雑で高度な課題の解決が求められます。考え方の違いによる意見の対立や、抽象的でどこから取り組んでいいかわからない問題などに出会ったとき、論理的思考ができると取り組みやすくなります。研究の過程で培った能力、つまり物事をわかりやすく整理し、中心的な問題を把握できる能力は、仕事だけでなく生活の様々な場面で役に立つと考えています。



井竿 富雄  
比較政治 研究室

## 専門領域・自己アピール

もともとの専門は、日本政治外交史です。このかかりわいで、外国語による「日本の政治」を講じてみたり、日本時代の台湾について考える実習に関わったりすることになりました。ただ、原点の部分を怠ると、どうやら発展形はうまくいかないようですから、このことも常に注意しておかなければならないと考えています。型を崩すにはまずは型がしっかりしていなければ。

## グローバルプロジェクトと地域実習

地域実習は、国際文化学科で行われている実習科目です。2年前期に「フィールドワーク実践論」という科目を履修し、合格した人だけが「地域実習Ⅰ」に進むことができます。この「地域実習Ⅰ」を学び終えた人が、さらにより自分の判断力や行動力を強くしたい、という場合、3年生で「地域実習Ⅱ」を選択します。これは、「地域実習Ⅰ」の学生を導く役になることが多いです。

「グローバルプロジェクト」は、当初は海外留学を経験した人たちが、国内でその行動力を活かす科目として想定していました。ですから3-4年の科目として置かれています。こちらは実習科目としては設定されていませんが、やはり計画立案から各種のイベントでの役割分担、その中の自分の位置づけなどを自分で考え、実行することが求められます。これを履修して修得した単位は、「インターラーカル人材」（一定級以上の語学検定合格などを備えた人に出る称号）認定に使うことができます。



吉本 秀子  
情報メディア論 研究室

## 専門領域・自己アピール

博士（政治学）。専攻はマス・コミュニケーション論。主要著書『米国の沖縄占領と情報政策：軍事主義の矛盾とカモフラージュ』（横浜：春風社、2015）（沖縄タイムス社より第43回伊波普猷賞）。『U.S. Occupation of Okinawa: A Soft Power Theory Approach』（Melbourne: Trans Pacific Press and Kyoto University Press, 2019）。

## コロナ対策の国際比較—県大「大使」の報告

本研究室では毎年、時事問題をとりあげ、討論している。2020年度は新型コロナウィルスの流行で大学が遠隔授業を余儀なくされた。そこで、今年度の3年「専門演習Ⅰ」では学生がそれぞれスウェーデン、ドイツ、オーストラリア、ブラジル、韓国、日本の「大使」の役割を担い、時事刻々と変化する各国のコロナ対策およびメディア報道の状況を継続的にウォッチして報告した。ゼミは6名で、各自が興味のある国を選択したので比較の規模に限界はあったが、コロナ対策が国によって異なる現状が浮き彫りになった。最終回は「模擬国連特別委員会」という仮想の国際会議を想定し、リモートで県大大使が各国のコロナ対策を報告、比較した。国際比較から日本の課題が可視化され、このような緊急時にこそ長所・短所を含めて各國のお国柄が顕著になることがわかった。



## PBL 実践事例

## 感染症対策を並行させた実習科目の実践

地域実習科目として、3つのプログラムをやっています。山口情報芸術センター（YCAM）については、現場に行けない状況を逆用し、Zoomを使った実習が可能になりました（2020年9月。オンラインでできるイベントコンテンツの作成）。こういう紹介ではなかなかお見せしにくいですが、コロナで外に出られなくてもデジタルでつながることは可能なことが分かる経験でした。

逆に、山口のクリスマスマーケットは、学生が実際に企業へ赴いたりして準備を重ねました。実行団体の方々の感染症対策などの尽力が実り、2020年12月に無事に開催されました。なかなか外遊びができない子供さんなどには好評だったようです。そろりそろりとできることをやりながら進んでいるところです。

海外フィールドワークは、2019年にMOU（交流協定の第一歩）を締結した台湾・中正大学と現地へ行きたい本学の学生が、2020年12月、オンラインで双方の学生生活について共同研究してプレゼンしました。まず難しかったのは言語の壁だったようですが、それもうまく乗り越えていったことは評価できます。コロナウィルスが収まって国境があいたら行ってきてほしいと思います。



企業との顔合わせ



クリスマスマーケットの様子



中正大学とのMOU締結式



岩野 雅子  
異文化交流論 研究室

## 専門領域・自己アピール

日本国際文化学会を通して全国のさまざまな国際文化関連学部の先生方と情報交換をし、教育や研究を進めています。国内外で学生と行ったフィールドワーク報告書はホームページに掲載中。今は英語力と専門領域を同時に育てる CLIL 教育法や、国際化・多文化共生に向けた地域づくり、大学の教育改善に関する研究などに取り組んでいます。

## 地域に出て自分の可能性を伸ばす

専門演習（ゼミ）では、大学生コンテスト、キャンパスベンチャーグランプリ、論文コンテストなどを選んで、個人あるいはチームを組んで出場しています。2018 年には社会人基礎力グランプリ（中国・四国地区大会）「奨励賞」を受賞し、2019 年には大学生観光まちづくりコンテスト（訪日インバウンドステージ）でポスター賞を受賞しました。2020 年度も大学生観光まちづくりコンテストに応募しました。コロナ禍でインバウンド観光が打撃を受けており、岩国基地に暮らす米軍関係者とその家族約 6000 人を対象とした地域での観光交流の促進プランで佳作に入賞しました。別のチームは SDGs 大学生コンテストに応募し、プレゼンテーションの準備をしています。



東京大会でポスター発表

## PBL 実践事例 国際交流を通した地域課題への取り組み

地域の課題解決策を探るプロジェクト例を 3 つ紹介します。一つ目は、JICA 海外協力隊の活動を支援する「山口県協力隊を育てる会」（1978 年創設）の 43 年にわたる写真記録のデジタルアーカイブ化です。コロナ禍でパネル展示や講演会の実施が難しい中、多くの人にいつでも、どこからでも見ていただけるように写真や資料をデジタル化する作業です。

二つ目は English Camp に参加し、ネイティブの先生方と小中学生との間をつなぐものです。米海兵隊岩国航空基地がある岩国市では「英語があふれる地域づくり」を目指して、英語教育の拠点となるセンターを建設中です。教育委員会の支援を受け、英語漬けになるプログラムの地域展開の仕方にについて学びました。

三つ目はロシアの姉妹大学とのオンライン上での学生研究交流です。日本で盛んな各種大学生コンテストを通して企業は大学生に何を期待しているのかや、日本の若者の英語学習に関する課題について英語で発表し、ロシアの大学生と意見交換をしました。

その他、彫刻のまち宇部市のウォーキングツアーマップ作成、山口日英協会の中学生英語スピーチコンテストの手伝いなど、実際の課題と向き合いながら学ぶ機会を大切にしています。



企画案作成中！



学外でフィールドワーク



ロシアの大学とのオンライン学生研究交流会



ウィルソン・エイミー  
アメリカ社会論 研究室

## 専門領域・自己アピール

大学卒業後に来日し、ALT として山口県に住み始めました。英語科目や、異文化理解、アメリカ社会論の科目を担当しています。

研究領域として、アメリカと日本の高齢者の生きがいや子供の価値観形成について研究し、近年は学生をハワイにスタディツアーに連れて行って、アクティブラーニングや多文化共存について研究しています。

## コロナ禍中のオンライン国際交流

コロナ禍での新しい国際理解・国際交流教育のあり方についての模索が続いている。

今年度、海外派遣・受け入れによる授業活動の代替として、急速に注目を集めるオンライン上の協働授業（COIL：Collaborative Online International Learning）に焦点を当て、本学はアメリカの 2 つの大学と 2 科目を行った。

一つ目は「印象派画家ゴッホはどのように日本画に影響されたか」というテーマ、もう一つは海外大学の美術専攻生を対象に日本文化に関するテーマ（着物、鎧、日本のファンションなど）を設定した。個別テーマに関する共同ディスカッション、プレゼンテーション資料の作成および合同発表を実施した。実施後の両国の学生によるコメントでは、新しい視点から考えることができて、非常に刺激になったという意見が多かった。

今日のグローバル社会において世界市民として必要なコンピテンシーを育成するために、異文化理解や異なるものへの柔軟性、コミュニケーションスキルなどを育てる教育プログラムとして、COIL は今後も期待できる。

## PBL 実践事例 「Arts in Asia -Silk in Japan」ノーザンイリノイ大学との COIL 授業

「Arts in Asia -Silk in Japan」の科目では、米国大学生たちは多くの参考文献や資料、論文を読み、silk に関する歴史的・社会的・文化的・芸術的考察を行ったうえで、本学学生と authentic（真正性）な学びを体験するために COIL を通じて 4 回の協働授業を受けることを目的とした。本学側の授業の目的は英語力向上にあるため、ノーザンイリノイ大学生の質問を受けながら、グループ別に英語での発表資料を作成し、10 分間の英語での発表を行う学習経験を得ることを目的とした。アメリカ人学生の履修者は 6 名、日本人学生は 19 名であり、人数的にアンバランスな状況であったが、グループ分けはアメリカ人学生 1 名に対して日本人学生 3-4 名とし、今回はアメリカ人学生にリーダーを依頼した。

上記の授業実施前後のコメントを書いてもらったが、全体的に COIL 開始前は日本人学生が英語力には自信がなかったが、実施後はほとんど肯定的なコメントをしている。特にアメリカ人学生から大変好評を得ていることが印象的である。

このようにアメリカ人学生と一緒に日本の歴史・文化について勉強できたことは、日本人学生にとって日本文化のすばらしさの再発見につながり、貴重な体験だった。今後も続けていきたい。



アメリカ大学生とのオンライン授業



日米学生グループ発表①：浮世絵版画に使われる紋について



日米学生グループ発表②：歌舞伎衣装の柄の使い方（意味合い）について



進藤 優子  
国際経済論 研究室

## 専門領域・自己アピール

専門は日本や開発途上国における教育政策が経済成長に与える影響に関する理論およびシミュレーション分析です。開発途上国での実務経験に基づいて、実践的な研究を目指しています。本研究室では、経済学の基本的な考え方を理解し、フィールドでの経験に基づいて、研究を行うことを目指しています。

## 経済学を学んでフィールドへ

NPO 法人シャンティ山口が支援しているタイ山岳少数民族の村でフィールドワーク、中国でユニクロやイオンなどの日系企業の調査、読売旅行と韓国で観光資源開発、山口県の特産品である小野茶や外郎を海外に向けて発信など様々なプロジェクトを実施してきました。2017 年度卒業生はキャンバスの放置自転車を減少させるため、YPU ドリーム・アドベンチャー・プロジェクトに採択され、撤去予定の自転車を修理しレンタルを行ったり、ポスターを制作しその効果を測定したりしました。2018 年度卒業生は「明治 150 年プロジェクト若者『志』ミーティング」に参加し、RESAS（地域経済分析システム）を用いて調査を行い、インバウンド振興のために SNS を開設し、各種メディアに取り上げられました。



知事に対してプレゼン (2017)

## PBL 実践事例

## 慶尚南道・山口県との交流事業に係る観光資源開発

山口県と姉妹提携を締結している韓国慶尚南道との相互交流を図るために、山口県の古民家および慶尚南道の韓屋に着目し、それらの観光資源としての活用可能性を調査することを目的として実施しました。事前学習では、山口県観光連盟海外事業部長高田義治氏、女たちの古民家代表理事松浦奈津子氏、読売旅行山口営業所六車陽子氏をはじめ多くの方から指導を受けました。フィールドワークでは、山口県内の古民家および慶尚南道の韓屋を中心に、体験内容、交通、消費につながるコトやモノ、外国人への対応などについて調査を行いました。視察先の情報を SNS で発信し、韓国語あるいは日本語で発信されていないものは自分たちで翻訳し発信しました。学生は古民家および韓屋の歴史的価値について理解を深め、観光資源としてそれらを活用するために、旅行商品を企画し、販売することができました。「地域実習Ⅰ・Ⅱ」の公開発表会で履修者だけではなく地域の人に対して活動を報告するとともにチラシを配布しました。また、購買や商店街など学内外でチラシを配布し、山口ケーブルビジョン「まちかど NEWS」で告知を行い、ツアーを無事決行することができました。



「まちかど NEWS」で告知



スワンソン・マーク  
実践英語 研究室

## 専門領域・自己アピール

専門領域は第二言語教育です。その他、様々な研究トピックに携わってきましたが、主たる研究トピックは英語教育、教師の能力開発、クリティカル・シンキングです。私の教育の目標は大学生の英語力を高めるとともに、国際的視野を広げるよう促し、今日のグローバル社会に活躍できるように指導することです。

## English and Critical Thinking Skills Can Unlock the Door to Your Bright Future!

グローバル化社会において活躍するためには異文化理解能力とクリティカル・シンキングが欠かせないスキルとなります。今日のような情報過多の時代において、いわゆるフェイクニュースなどに惑わされず、的確に状況を判断するためにはクリティカル・シンキング・スキルが最も重要な要素になります。

スワンソンゼミでは、物事を客観的に、批判的に考える能力の向上を目指します。ゼミ生には、複数の認知バイアス (Cognitive Bias) と論理的誤謬 (Logical Fallacy)などを含め、国や地域の文化・価値観・視点の違いを認識することを勧めています。様々なバイアスの存在に気付くことは、固定観念、偏見などに振り回されないための大歩です。

山口に来る前は、接客英会話の便利帳の出版や中京警察署での接客英語の講座の担当など京都の皆さんと様々な地域活動をしました。山口の皆さんとも様々な地域活動をしていきたいと考えています。

## PBL 実践事例

## English is your Tool to Connect with the World!

山口市、山口商工会議所と連携して、毎年 12 月中旬の土日に『やまぐち・フィンランド・クリスマスマーケット』が開催されます。私はクリスマスマーケットのマネージャとして、イベント活動の計画に携わっています。クリスマスマーケットは異文化交流を促進する素晴らしい機会であり、実践的に英語を使って異なる文化や外国人の人々と交流する機会を与えてくれます。例えば、私はフィンランドのサンタさんとクリスマスマーケットの委員会のメンバーとの間のイベント計画を容易にするための翻訳作業を担当し、クリスマスマーケットでサンタさんのヘルパー役になった山口県立大学の学生の活動を支援しました。

将来的には、学生と私自身が異文化交流を促進するうえで、英語を実践的に使用する新しい方法を見つけることを楽しみにしています。異文化の人々と交流するイベントは、社会に永続的な影響を与えることができると思っています。



クリスマスマーケットの様子



ブース販売



メインステージ



畔津 忠博  
視覚情報 研究室

## 専門領域・自己アピール

画像や音声といった身近な信号に対して、コンピュータを用いた信号処理を行うことを主な研究テーマにしています。例えば、取得した信号に対して雑音を除去したり、目的に合わせて強調処理をしたりといった内容です。最近は、人間の視覚特性を考慮した画像強調に取り組んでいます。

## 情報処理のいくつかの応用

人間の視覚特性を考慮した画像強調を行うときは、色の基本属性である色相、彩度、明度や、それぞれの関係性に注目する必要があります。また、色を表現する色空間にはさまざまなものがあり、それぞれの空間において色相・彩度・明度の定義が異なります。そのため、研究では、より自然な画像強調が行えるような色空間の選定や、その色空間を利用する際に生じる表示可能な色の範囲（色域）の問題を適切に処理できるような方法の検討を行っています。これらの応用として、明度や彩度が十分でない画像に対する高品質な強調処理や、さまざまな環境における見やすい画像の作成などが期待できます。また、データ分析にも興味があり、アンケート調査や学習活動などで得られたデータに対して統計的な分析を行っています。



稻田 秀雄  
日本芸能論 研究室

## 専門領域・自己アピール

私の専門領域は、日本古典芸能（特に能・狂言）、日本中世文学（『平家物語』など）です。能・狂言は「能楽」として、ユネスコの無形文化遺産にも登録されています。当研究室ではそうした能・狂言の特質や魅力、そしてその背景となる日本中世の文学の世界を皆さんといっしょに探究しています。

## あなたの知らない古典芸能の世界を探究してみよう。

山口市には、近代にプロの流儀としては廃絶した鷺流（さぎりゅう）の狂言が、山口県指定無形文化財として伝承されています。私は、能・狂言の研究者として、山口鷺流狂言保存会顧問という立場において、この貴重な山口鷺流狂言の伝承活動をこれまで支援してきました。具体的には、毎年の定期公演の際のパンフレット（曲目解説）執筆や当日の解説、復活上演する演目についての助言を行ったりしています。2020年度の活動としては、オンライン発信の新作狂言「ちょうちんまつり」台本作成の手伝い、米国ニューヨーク市立大学ハンター校主催の山口鷺流狂言リモートイベントへの参加などがあります。また昨年2月から鷺流狂言を応援する「芸能サークル『結-yui-』」が発足しています。私が顧問を務めていますので（2023年3月まで）、参加をおすすめします。皆さんにとって未知なる古典芸能の世界にぜひ触れてみてください。



池田 史子  
日本語学 研究室

## 専門領域・自己アピール

山口方言では、撥音・促音・長音などの特殊拍にアクセントの下がり目が来ることがありますが、若年層では、共通語と同様に特殊拍には下がり目が来なくなっていることを明らかにしました。

アクティブ・ラーニングの方法を用いた日本語ライティング授業や、ピア・サポートによるライティング支援についても研究しています。

## ジグソー法を用いた日本語ライティング授業

他者との相互作用のなかで知識を集約し、新しい価値を創造することが求められています。そこで、知識の集約を促進させる多面的・総合的視点を育むために、分野横断型課題を用いて、他者との相互作用を生み出すジグソー法による日本語ライティング授業を行っています。

ジグソー法は、異民族からなる子供らが互いに協同することで隔たりを解消することを目的として開発され、今日では教室のなかで建設的相互作用を引き起こす仕掛けとして使われています。学習者に課題を提示し、課題解決の手がかりとなる知識を与えて、その部品を組み合わせることによって答えを作り上げる協調学習の「型」のひとつです。教室をフィールドとしたPBLとも言えます。

「日本語表現学」では、課題の理解、持ち寄った情報の吟味、論拠の強弱判断、アウトライン構成などの過程にジグソー法を取り入れています。現在、共同研究者とともに、教材開発を進めているところです。



菱岡 憲司  
日本文化論 研究室

## 専門領域・自己アピール

私は日本文化論、なかでも日本近世文学（江戸時代の文学）を専門としています。日本文化論研究室では、くずし字を読み、和本をはじめとした江戸時代の一次資料を取り扱うなど、文献学的な手法を身につけることを重視しています。日本古典文学を、世界の文化・文学のなかで相対的に論じていく姿勢を養っていきたいと思います。

## くずし字教室の開催

日本文化論研究室では、年間を通じて週1回、自主ゼミを開催しています。自主ゼミでは、江戸時代の版本をあつかい、くずし字読解能力を身につけます。コロナ下でもZOOMを使った遠隔で行いました。そして、夏休みに小学生対象の「こどもくずし字教室」を開催し、地域へ学習成果の還元を行っています。こちらも、コロナが収束した後、再開する予定です。



「こどもくずし字教室 2019」



古別府 ひづる  
日本語教育 研究室

## 専門領域・自己アピール

日本語教員養成担当。日本語教師と日本語アシスタントの資質について研究している。現在は、ASEAN 諸国、特にタイの中等教育機関に派遣されている日本語パートナーズの研究をしている。

## 技能実習生に対する zoom での日本語教育実習

コロナ禍の中、山口県内のお弁当工場で働くベトナム人技能実習生に 2020 年 7 月後半から 9 月末まで、日本語教育実習を行いました。技能実習生達は、18 時半から 20 時まで、仕事を終えてから授業に意欲的に参加してくれました。一方、県立大学の実習生の感想は以下のようにでした。

- ・私は日本語教師になることを目標にしているため、オンラインで教鞭を執るという本当に貴重な経験をすることができ感謝している。今後オンラインでの授業は増えていくことが予想されるが、その時にはこの実習で見つけた工夫のしかたや問題点などを活かしたい。
- ・zoom での実習は長期戦で大変だったが、終了後の達成感が大きく自信につながった。「私が日本語を教えて、それが彼らに伝わり理解してもらえた」ことがとても嬉しかった。
- ・私達は日本語を流暢に話せるが、日本語のことは全然分かっていないと感じた。

以上、新しい時代に突入したことを実感する実習でした。

松尾 量子

ファッショングループ 研究室

## 専門領域・自己アピール

地域・生活・文化をキーワードとして、服飾やテキスタイルを中心に研究創作活動を行っています。2019 年度は、寺内正毅着用大礼服について、着用体験を目的とした復元制作を行いました。2020 年度からは、山口県出身の小説家宇野千代が編集・発行に携わった雑誌『スタイル』の研究に取り組んでいます。

## 地域の文化や産業資源への理解を深める

2017 年度より、地域の文化や産業資源への理解を深めるため、柳井市の伝統織物である「柳井縞」をテーマとしたプログラムを行っています。このプログラムでは、「柳井縞」についての学びを通して、地域の染織工芸における手仕事の意味や意義を学ぶと共に、現代の生活空間に即した伝統織物の活用を考えます。2020 年度はコロナ禍での実施のため学外での成果報告は行いませんでしたが、2019 年度は、「柳井縞の会 25 年の歩み」展において、パネル発表を行いました。

2019 年度には、周南市に本社を置くサマンサジャパン株式会社との PBL に取り組み、ブランドイメージの一つであるスタッフのユニフォームの魅力を伝えるため、ユニフォームの工夫や特徴がわかるように、イラストと写真を組み合わせたページのデザインを提案しました。HP のサマンサブランドのページに「ユニフォーム紹介」としてアップされています。



吉岡 一志  
教育社会学 研究室

## 専門領域・自己アピール

教育社会学の視点から、子どもと大人の関係性の成り立ちを解明し、子どもと大人の新しい文化を創造することを目指しています。これまで「学校の怪談」をめぐって児童・生徒と教師がいかなる関係を取り結んできたかを調査してきました。現在は大人と子どもの関係史の観点から、「怪談」の歴史的変遷に注目しています。

## 「怪談」を語る人々の意識の変化に迫る

中世から近世への移行過程において、妖怪などの神秘的存在への信仰は徐々に弱まっていくと言われます。現在に至りますます、人びとは妖怪を信じなくなっています。しかし、確かに「感じる」はずの妖怪を存在しないものとして理解することは、相当の自己抑制を必要とします。その意味で、自己中心的な子どもは、その自己抑制がきかなければ、妖怪を否定することができません。近世において、人びとが自己の衝動を制御してふるうようになる過程で、妖怪への信仰が弱体化すると同時に、自己制御が十分にできない子どもが、大人とは異なる存在として浮かび上がってくると考えられます。この仮説を文学や日記などの過去の文献資料をもとに明らかにしていくことが現在の研究課題です。この課題は、現在において妖怪を信じない大人と信じてしまう子どもという権力関係を再構成し、新たな大人-子ども関係を創造していくために役立つと考えています。



松尾 量子

ファッショングループ 研究室

## 専門領域・自己アピール

地域・生活・文化をキーワードとして、服飾やテキスタイルを中心に研究創作活動を行っています。2019 年度は、寺内正毅着用大礼服について、着用体験を目的とした復元制作を行いました。2020 年度からは、山口県出身の小説家宇野千代が編集・発行に携わった雑誌『スタイル』の研究に取り組んでいます。



渡辺 滋  
日本史 研究室

## 専門領域・自己アピール

日本史が専門です。これまで、とくに前近代の地方行政、日本漢文の形成過程、歴史史料論などを中心に研究してきました。近年では山口県の歴史にも興味を持ち、古代・中世の国府や寺社、あるいは近代の寺内正毅首相などについても研究を始めました。まだまだ未開拓の分野で、やりがいを感じつつあるところです。

## 史料現物に即した研究

現代社会には、聞こえの良いキャッチフレーズとか、一見では華々しい物事などが、あふれています。しかし実際、本質的な価値についてきちんと検討されたうえで、そうした評価を得ているものは、それほど多くありません。大学における研究では、そうした「なんとなく」のイメージから脱して、根拠となる「史料」に基づいて、きちんと論理的に分析を進めていく姿勢が求められます。

日本史研究室では、以上のようなスタンスを守りつつ、これまで県内各地の自治体や、全国各地の企業などと共同して、地域の歴史を史料現物に即して調査・研究し、様々な成果を上げてきました。今後も、より広い範囲で、積極的にそうした作業を積み重ねていく予定です。



## やまぐちにゆかりのある 文学者についての調査・研究

加藤 穎行  
日本文学 研究室

専門領域・自己アピール

近代（明治以降）の日本文学における小説表現をおもな研究領域として、調査・研究に従事している。また明治期の出版物（図書・雑誌等）についての書誌学的な研究も行っている。県立大学では郷土文学資料センター研究員も兼任しており、やまぐちにゆかりのある文学者についての地域向けの講座・展示などにも取り組んでいる。

山口県立山口図書館に設けられた「ふるさと山口文学ギャラリー」という展示スペースで、およそ2年に1回、学生と一緒に郷土文学資料展示を作成しています。2020年度には展示「宇野千代と〈やまぐち〉」を作成しています。他にこれまで同スペースでは、「国木田独歩と〈やまぐち〉」（2018年度）、「山口県立大学郷土文学資料センターのあゆみ」（2016年度）、「嘉村礪多が残したもの」（2015年度）、「『新潮』編集者、檜崎勤の文学活動」（2013年度）他の展示を、文化創造学科の実習科目として作成してきました。今後もこうした地域の文学についての調査・研究を踏まえた情報発信を継続していくと考えています。



### PBL 実践事例 ふるさと山口文学ギャラリー企画展「宇野千代とやまぐち」

山口県立山口図書館において、2021年1月12日～4月29日までの期間、ふるさと山口文学ギャラリー企画展「宇野千代とやまぐち」を開催しています。宇野千代は、1897（明治30）年から1996（平成8）年まで、明治・大正・昭和・平成と四代を生きた、山口県岩国市（旧玖珂郡横山村）出身の女性作家です。故郷岩国を出奔したのち『脂粉の顔』（1923（大正12）年6月、改造社）で文壇に登場し、尾崎士郎や東郷青児との交流を経て、昭和戦前期には代表作『色ざんげ』（1935（昭和10）年4月、中央公論社）を、そしてまた昭和戦後期には、『生きていく私』（1983（昭和58）年、毎日新聞社）がベストセラーとなり、多くの読者に愛されました。今回の展示では、宇野千代の作品のうち『おはん』（1957（昭和32）年6月、中央公論社）、『水西書院の娘』（1977（昭和52）年3月、中央公論社）などの県内ゆかりの作品を、山口県立山口図書館及び山口県立大学郷土文学資料センターの所蔵資料とパネルにより、展示・紹介します。また、あわせて、ほかの宇野千代の作品や資料についても展示・紹介します。



「宇野千代とやまぐち」（2020年度）3



倉田 研治  
メディアデザイン 研究室

専門領域・自己アピール

デザインやアート思考のアプローチから、現代的なテクノロジーや表現の視点を用いて、新たな価値形成の創出を試みています。地域資源と写真・映像表現、GIS（地理情報システム）を結びつけた横断的な表現活動や文化利用を探求しています。地域の人たちとかかわり、学生とともに学びながら研究創作を進めています。

## 地域をフィールドとした メディア表現の取り組み

山口市：山口アーツ＆クラフトの運営や出展する授業を展開しています。イベント運営の流れやワークショップ補助の体験と、自分たちでワークショップ実施や出展を企画運営するプロジェクトを実施しています。関連する授業では、スカーフをデザインからPRまで企画立案し、商品化もされています。

防府市：景観ワークショップなどを実施し、地域資源の魅力をWeb上で発信・アーカイブしています。野島では、学生目線で魅力を写真撮影して、マップにまとめた「のしまマップ」を作成、ポスターとWebサイトによる発信をしています。



2019 山口アーツ & クラフト出展の様子

### PBL 実践事例 シュシュ山口店 Web CM 制作プロジェクト

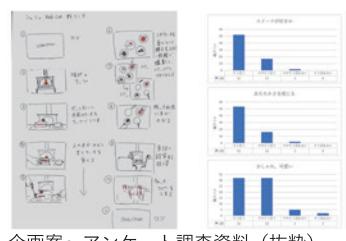
あさひ製菓株式会社×メディアデザイン研究室による、シュシュ山口店Web CM制作プロジェクトを実施しました。

企画提案から撮影・編集、アンケート調査などを実施してWeb CM制作を進めました。学生目線の企画提案を繰り返し協議して、制作内容を絞り込みました。店舗スタッフとのコミュニケーションをとりながら、ブランドの持つ雰囲気づくりを意識して撮影や取材を進めました。撮影や編集技術の向上とあわせて、タイムスケジュールの管理やスタッフとの調整等、プロジェクトのマネジメントを身につけることも学びました。意思疎通がうまくいかないこともありましたが、Webミーティングなどを定期的に行うことにより、円滑な制作進行ができるようになりました。プロトタイプは、学内試写を実施して、アンケート調査による効果測定なども試みました。調査を取り入れることで、客観的な視点もふんだんに盛り込まれました。

成果として、制作したWeb CMはシュシュ山口店のオフィシャルInstagramにて公開・共有されています。実践的なフィールドでの共創により、新たなPR効果の創出と学生自身がレベルアップを実感できるプロジェクトになりました。



撮影取材の様子



企画案～アンケート調査資料（抜粋）



オフィシャルInstagramでの公開・共有



小橋 圭介

グラフィックデザイン 研究室

## 専門領域・自己アピール

グラフィックデザインとは、主に平面 上に表示される文字・画像・色彩などを 使用して、情報やメッセージを伝達する デザイン領域です。本研究室では、地域 の企業や団体と連携し、チラシ・ポス ター・サイン・パッケージなど様々な媒 体制作を通して、社会における視覚伝達 の可能性を探求しています。

## 視覚伝達の可能性

山口市：地域密着型銀行の創立記念事業に伴い、「通帳デザイൻ」のリニューアルを担当しました。学生によるデザインコンペ形式を採用し制作過程も含めてイベント化することで、広報活動を積極的に行いました。

萩市：同市企業組合からの依頼で、農産物を用いた加工品のシンボルマークやパッケージデザイン、販売時に活用するのぼりや法被など制作物一連に関する「プランディング」を担当しました。

防府市：新施設の建設に伴い、施設説明のための広報媒体（パンフレット）制作を依頼されました。現地視察や担当者との打ち合わせを繰り返し、約半年のプロジェクトを実施しました。



制作した広報媒体

## PBL 実践事例 ありがとうの想いを形に

今年度のPBL事業は、グラフィックデザイン研究室3年生が株式会社アデリー（柳井市）と共に商品開発に取り組みました。課題内容は、カタログギフトの「パッケージ」及び「商品カード」のデザインです。

「ギフトシーズンに“ありがとう”を伝える」をテーマに、学生一人ひとりが現状調査や情報収集をはじめ、コンセプトを一から作りあげていきました。定期的に行うプレゼンテーションで学生たちは自分の考えを先方に伝えていきますが、相手はプロのデザイナー集団のため一筋縄にはいきません。学生の想いを汲み取った上で発せられる的確な指摘を真摯に受け止め、学生たちは作品をより良くするために「何を残すべきか・削るべきか」を悩み、決断する能力を確実に向上させていきました。最終的に学生たちがデザインした作品は、印刷会社の製造工程を経て本格的な仕上がりとなっています。

最終成果物は、株式会社アデリーのアンテナショップ「ギャラリー & ギフトアド柳井店」で展示し、来店者を対象にアンケートも実施しました。作品に対する評価を直接聞くことで、学生たちは現場から多くの学びを得ることができました。



斎藤 理

地域文化創造論 研究室

## 専門領域・自己アピール

日欧の文化遺産分析を中心に、歴史的建造物を活用した観光まちづくりや、地域文化を支えるコミュニティ・サービスラーニングの実践的研究等を進めています。近年は国際文化学（文化間の接触で生まれるダイナミクスに着目する学び）を基盤に、地域社会の文化的ポテンシャルを向上させる試みを様々な自治体と共に取組んでいます。

## 人の行動論的アプローチから 新たなPBL手法を試みる

私の研究室では、グローバル時代に対応し、世界のどこでも実践できる地域文化調査法の開発を進めています。とくに地域社会における人々の行動に着目した独自のVERM (The Verbs Extracting Research Method) を各地で試行。これをベースにPBLも進めています。

例えば、山口県柳井市では、豪商が建ち並ぶ地域をつぶさにフィールド調査し、およそ200年前の献立を発見。これを忠実に再現し歴史的街区で提供するプロジェクトを開きました。かつての「動詞」を現代に蘇らせる試みです。

こうしたPBLに取り組んだ結果、大学生による全国観光アイディアコンペ（公益財団法人日本観光振興協会主催）において2年連続で入賞（全国1位／2位）するなど具体的な教育上の効果がもたらされています。



プロデュースされた歴食 [二百年御膳]

## PBL 実践事例 新たな「関係人口」創出に向けたPBL活動の試み

2020年度においては、山口県下松市においてPBLプログラムを開展しました。そのステップは次のようです。

- 1) [課題認識]：まず同市の現況についてパンフレット・統計資料等を通して詳細に把握し、行政担当者の皆さんと意見交換しながら、今後の課題となりそうなポイントを挙げていきます。
- 2) [実態調査]：次に、これらの課題解決に繋がりそうな提言を、解りやすいように「新たに生み出したい動詞」に沿って30案程度にまとめます。さらに同市の取り組み課題に即して「交流人口」、「関係人口」、「定住人口」に関わるものにそれぞれ分類し、提言を構造化していきます。また、現地でも関係者の皆さんの話を伺いながら提案を肉付けしていきます。
- 3) [実効性のあるプランニング]：最後に、上のプロセスで得られた情報の絞込みです。今回は、「ものづくりの街、下松」というブランド性と、「観光力が弱い」という同市の弱点を掛け合わせた「ショクバカンス・プロジェクト」としてまとめました。これは、[働く]の周りに新しい観光シーンを創り、世のなかのパパを「誇り高き観光ガイド」にしてしまうユニークな企画で、2020年度の「大学生観光まちづくりコンテスト」（後援：観光庁、文部科学省、総務省、経済産業省）に応募したところ、全国236チーム中、見事、ベスト20に入賞しました。



大学生による提言を構造化していきます





水谷 由美子  
企画デザイン 研究室

## 専門領域・自己アピール

地域資源のレジリエンスに着目し、山口県内の伝統文化や自然などに着想を得た服飾デザインで地域活性化にチャレンジ。ラップランド大学ファッショントキスタイルデザイン分野の研究室と2009年から共同研究を開始し、サービスデザインの手法を取り入れ、サステナブルなファッショントライフスタイルを追求している。

## 国際交流と三つの 'DREAM COMES TRUE' 物語

2002年12月にクリスマス・ファッショントショーを山口中心商店街ではじめて開催した。同年、筆者はヘルシンキ芸術デザイン大学（現アールト大学）に客員教授として滞在し、帰国前にフィンランドの有名ブランドMarimekkoを訪問した。そこで山口で開催予定のファッショントショーに生地提供を依頼し快諾された。その結果、学生は好きなテキスタイルを選びデザインし、空輸されてきた生地で作品を制作した。その学生の中に現在Marimekkoデザイナーを担う大田舞（MAIOHTA主宰）がいた。上記ショーの中で、サンタファッショントコンテストも開催した。奇跡が起きた。2010年からは本物のサンタクロースがロバニエミ市から来て、上記ショーの後継コンテストに参加している。

山口市は2017年にロバニエミ市と観光パートナーシップ協定を結び、2021年には5周年を記念して7月にオープン予定の山口市産業交流拠点施設「KDDI維新ホール」にてDESIGN WEEKが開催される。継続はネットワークを堅固にし、次々に創造の連鎖を生みだす。

### PBL 実践事例 PBL の一つの形 ～「SDGs 実現に向けたブルー&グリーン アートプロジェクト」を事例として～

現在、世界で解決すべき課題に海洋マイクロプラスティックの存在がある。SDGsのささやかな実現に向けて、「14 海のゆたかさを守ろう」「15 陸のゆたかさを守ろう」に着目し、標記のプロジェクトを2020年度から開始した。同年10月に旧文洋小学校（長門市）を会場に、NPO法人ゆや棚田景観保存会の協力を得て、シンポジウムとファッショングランピュレーションを開催した。以下は地域との協働による事前活動である。

- 油谷湾で塩を作っている百姓庵のスタッフと20名程度でビーチクリーニングをして、30分で長門市のトラック2台分のプラスティックゴミが採取された。その後、百姓庵代表から「この海水の豊かなミネラルは、陸の環境と密接に関わっている」という話を聞いた。
- 山口で守りたい海の生物に日本でも最大級の生息を誇る周防大島の二ホンアワサンゴがある。生育する海の沖を眺めながら、専門家から地家室の陸の保全がサンゴ生育の鍵だと聞いた。
- 東後畑の棚田で2019年に耕作放棄地がハーブ畑とコスモスに開墾された。そのプロセスに参加した。

ゼミ学生は上記リサーチから着想を得たアイデアから服飾デザインをし、上記NPOが自発的に制作したコスモス畑内の舞台で発表（YouTubeで配信中）できた。PBLには協働者との信頼関係構築がもっとも大切である。



安光 裕子  
図書館情報学 研究室

## 専門領域・自己アピール

研究テーマは、①公立図書館における資料の取扱い、②子どもの読書、③学校図書館の利用促進、④司書・司書教諭の養成など、図書館全般です。山口県立山口図書館運営協議会や山口県読書活動推進協議会、山口市立図書館協議会の会長などを歴任、図書館情報学という専門性を活かした、地域に存在する課題を解決すべく地域に根差した活動を展開しています。

## 日常生活の中に図書館のある風景 —図書館 × 大学生 コラボ企画—

本研究室は、宮野のキャンパスを飛び出して、地域の方々との交流を積極的に行ってています。ゼミ研修旅行の一環として先進的な図書館を見学し、その成果を『西日本図書館学会山口支部報』に投稿したり、パネルにまとめて図書館まつりなどで発表したりすることによって、図書館関係者や地域の方々に新しい図書館像の提案を行っています。さらに、山口市立中央図書館まつりで実施した、図書館職員と学生とのコラボ企画は、地域の方々が日常生活の中に図書館を活用するきっかけとなるものになっています。

これからも地域の方々との交流を通して、地域の課題を解決する一助となるなど、地域とともに成長していくたいと考えています。



学生コラボ企画のチラシ

### PBL 実践事例 図書館 × 大学生 3つのコラボ企画

2016年度から山口市立中央図書館まつりにおいて、大学生のアイディアを取り入れた、図書館職員と学生とのコラボ企画を実施しています。

新型コロナウィルス感染拡大防止に留意しつつ、2020年度は3つのコラボ企画を実施しました。そのうちの一つ「コロナに負けるな！クイズで学ぼう、病気の予防！」を紹介します。

この企画の背景には、コロナ禍であること、さらに図書館は知の宝庫、日常生活に役立つ情報・資料が蓄積されているにもかかわらず、そのことを知らない人が一定程度存在していることが挙げられます。情報社会にあっては、誰もが図書館を使いこなせることが求められています。この課題を解決するために企画しました。

企画の対象は、小学生とその親。狙いは、クイズを通して楽しくコロナのことを学ぶこと、図書館の使い方、本の探し方を知ることです。

アンケートには、参加者の大半(93%)が満足と回答し、自由記述には、クイズに答えることで「今まで以上に予防ができる」や「本の場所、探し方がわかった」との回答がありました。

他のプログラムを含めた3つのコラボ企画は、クイズやゲームなどを通じて、図書の検索方法や図書の所在を知るなど参加者にとって新たな発見があり、図書館がより身近な存在になるとともに、図書館を使いこなすための一助になったと思われます。

コラボ企画の活動風景  
(山口市立中央図書館)コラボ企画の活動風景  
(山口市立中央図書館)



山口 光

プロダクトデザイン 研究室

## 専門領域・自己アピール

生活雑貨などのデザイン・マーケティングなどの実務経験を活かして、プロダクトデザインを専門に活動しています。本学では地域振興を目的とした「地域産業デザイン」を中心としながら、伝統工芸から工業製品まで、山口県内の企業や自治体等との産学官連携による研究・創作活動およびブランディング等にも携わっています。

## 山口市、萩市などをフィールドとしたPBL

地域資源を活用した研究・創作活動の中で、学生も交えてのPBLも行っています。

山口市：徳地和紙を活用したデザインでは、学生を参画させ、団扇の商品開発を行いました（作品は東京・イタリアなどの国際展示会で発表）。また、大内塗りのデザイン活動を通じて、漆器の木地挽きなどの伝統技術の体験し、後継者の育成に向けた活動も行っています（伝統の継承）。

萩市：萩ガラスにおける商品企画やデザイン活動、ガラス工芸品の制作体験を行なっています（国際展示会で発表）。

その他、家具や雑貨などの企画・デザインを通じて、幅広く教育活動を行っています。



徳地和紙と銘木による団扇 KOUSA

## PBL 実践事例 伝統産業における制作体験と後継者育成

地域文化実習における教育プログラムの1つとして「クラフトデザインの制作体験」を行っています。2018年度からは、山口県内での後継者が不足している「木地挽き」における体験学習を継続中です。

「木地挽き」とは漆器などの中身（木地）を削り出す職人です。そもそも漆器は塗るための木地がないと、作ることができません。特に大内人形のような特殊なものは、作ってくれる人が1人しかいませんでした。何かあると、伝統が途絶えてしまいます。この体験学習は、より深く地域資源を理解するとともに、未来に向けて存続するために重要な経験になると考えています。

これは本学の別組織である「地域デザイン研究所」と連携した教育活動の一環でもあり、実際に地域の課題やニーズを拾い上げる形で授業を展開しています。結果としての後継者の育成にも繋がっており、卒業生による伝統産業などの後継者も生まれています。地域の歴史文化とデザインが融合した、文化創造学科らしい教育プログラムだと言えるでしょう。



木工作家による「木地挽き」の実技指導



地域文化実習による制作体験



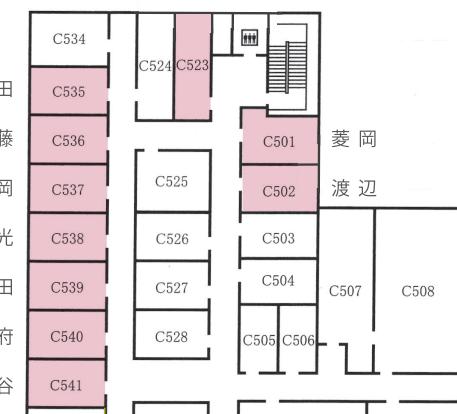
学生による作品の事例（木椀）

## 3号館 5F

国際文化学部  
研究室配置図

■ 国際文化学科  
■ 文化創造学科

加藤

C507 国際文化学部長室 & 学部事務室  
C508 会議室C509 国際文化学部資料室  
C510 和室

山口県立大学 国際文化学部 教育・研究・創作 PBL を活かした活動の計画と成果

研究室のドアをノックしたら Vol. II ~ 国際的視野に立ち 地域での課題発見・解決を目指して ~

編集者：水谷 由美子 グラフィックデザイン：下川 まつゑ

発行者：山口県立大学 国際文化学部 〒753-0021 山口市桜島 6-2-1

TEL : 083-929-6258 Email : kokusai-jimu@fis.ypu.jp

発行日：2021年3月31日